

令和7年度第1回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」
合同研究発表会

2025. 8. 22

山梨県奈良田方言における 用言の活用形と終助詞の韻律

小西いずみ（東京大学）

ikonishi@l.u-tokyo.ac.jp

1. 本発表の背景と目的

- 奈良田方言
 - 山梨県南巨摩郡早川町（みなみこまぐん・はやかわちょう）奈良田（ならだ）集落で用いられてきた言語変種
 - 上げ核（次を上げようとする核）を弁別特徴とする多型アクセント体系を持つ。（上野1975, 1976, 1984など）
 - 用言の活用形のアクセント、終助詞など付属語（接語）のアクセントについては、断片的なデータしかない。
 - これらについて音声付きデータを整備中



-
- データ整備の過程で明らかになってきたことのうち、次の二つをとりあげる

1. 形容詞イ形のアクセント

- 0型（無核）とされてきた語は、語末に核を持つのではないか？

		終助 ka	接助 de	コピュラ doo	コピュラ推量 dura
赤い	ʼaʼkai	ʼaʼkaiʼka	ʼaʼkaiʼde	ʼaʼkaiʼdoʼo	ʼaʼkaiʼduʼra
cf. 着る	ʼkiʼru	ʼkiʼruka	ʼkiʼrude	ʼkiʼrudoʼo	ʼkiʼruduʼra ¹¹

ʼ 上昇 ʼ 下降 ¹¹ 直前のモーラのモーラ内下降

2. 終助詞付加形の音調

- 一部の終助詞付加形は、上昇の位置が後ろにずれる

		=jo	=ka	=ni
着る	ki ¹ ru	ki ¹ ru ¹ jo	ki ¹ ru ¹ ka	ki ¹ ru ¹ ni
着た	ki ¹ to ¹ o	ki ¹ to ¹ o ¹ jo ki ¹ to ¹ o ¹ jo	ki ¹ to ¹ o ¹ ka	ki ¹ to ¹ o ¹ ni ¹
見る	mi ¹ ru	mi ¹ ru ¹ jo mi ¹ ru ¹ jo	mi ¹ ru ¹ ka	mi ¹ ru ¹ ni ¹
見た	mi ¹ to ¹ o	mi ¹ to ¹ o ¹ jo mi ¹ to ¹ o ¹ jo	mi ¹ to ¹ o ¹ ka	mi ¹ to ¹ o ¹ ni

「 直後のモーラのモーラ内上昇

- **構成**

2. 調査と話者
3. 名詞句のアクセントと句音調
4. 動詞のアクセント
5. 形容詞のアクセント
6. 終助詞付加形の音調
7. まとめと課題

2. 調査の概要

- **調査**

- 2023年～2025年
- 一部は吉田雅子の調査・文字化による

- **話者**

- A. 1934年生まれの男性
- B. 1938年生まれの女性

ただし3節で扱う名詞句アクセントの一部データは、1998～2002年、主に1917年生まれの男性話者を対象とした調査による。

3. 名詞句のアクセントと句音調

2拍名詞



(話者 1917年生。小西2025より)

鼻	0型	「ハナ	「ハナカ°	イカ「イ	「コ「ノハナカ°
水	0型	「ミ「ヅ	「ミ「ヅカ°	アマイ	「コ「ノミヅカ°
帯	1型	オ「ビ	オ「ビ「カ°	ミジカ「イ	「コ「ノオ「ビ「カ°
雨	1型	ア「メ	ア「メ「カ°	フル	「コ「ノア「メ「カ°
犬	2型	「イ「ヌ	「イ「ヌ「カ° 1	ハシ「ル	「コ「ノイ「ヌ「カ°
花	2型	「ハナ	「ハナ「カ° 1	サク	「コ「ノハナ「カ°

• アクセント体系

- n モーラ語に $n+1$ 個のアクセント型がある（1～5モーラ名詞で確認）。
- 単語ごとに上昇の有無・位置が決まっている。
 - 弁別的特徴としての上昇「上げ核」raising kernel（上野1984, 1989, Uwano 2012）
 - 上げ核の直後の1拍が高いことが多いが、2拍以上高いこともある。

• イントネーション単位としての句頭の音調

- 1拍めが高く、2拍め以降は核による上昇まで低く実現（1拍めに核がある場合以外。上野1984など）
 - 上昇がない場合や、2拍分上昇が続く場合もある。

- ・ モーラが上げ核を担う（上野2019; Konishi, forthcoming）

- 促音を除く特殊モーラの前にも後にも上げ核が位置しうる。

1a. 「料理が」 rjo^ɾo^ɾriŋa

1b. 「草履が」 zjoo^ɾri^ɾŋa (注)

2a. 「額が」 kobi^ɾn^ɾŋa (注)

2b. 「4人が」 ^ɾjo^ɾni^ɾn^ɾŋa

(注) 話者Aは2モーラ目に核がある場合、句頭の上昇がないことが多い。
以下、名詞句や述語句のみを示す場合、核がない場合か、3モーラ目以降に核がある場合に句頭の上昇を表記する。ただし出典がある場合はその表記に従う。

- **アクセント単位としての「名詞＋助詞連続」**（Konishi, forthcoming）

- 一部の助詞は有核だが、名詞が有核のときは助詞の核が実現しない。
- 助詞連続の場合、助詞どうしの境界に核が置かれる。名詞が有核でも顕現（`ʼuʼmaQʼkiʼriŋa` のように名詞末に核がある場合は例外か）。

	飴（0型）	帯（1型）	馬（2型）	蠅螂（1型）
=ŋa 主格	ʼaʼmeŋa	oʼbiʼŋa	ʼuʼmaʼŋa	kaʼmaʼkiriŋa
=Qkiri 限定	ʼaʼmeQkiri	oʼbiʼQkiri	ʼuʼmaQʼkiʼri	kaʼmaʼkiriQkiri
=sika 限定(1型)	ʼaʼmesiʼkaʼa	oʼbiʼsika	ʼuʼmaʼsikaʼa	kaʼmaʼkirisika
=Qkiri=ŋa	ʼaʼmeQkiriʼŋa	oʼbiʼQkiriʼŋa	ʼuʼmaQʼkiʼriŋa	kaʼmaʼkiriQkiriʼŋa

・ アクセント型の所属語彙、周辺方言との関係

- 2拍名詞の類別語彙との対応 **1類（0型）／2・3類（2型）／4・5類（1型）**
- 上げ核の位置は、東京方言の下げ核の位置とおおよそ対応する。東京方言より山梨西部方言と対応する場合が多い（稲垣1957, 小西2001）。
- 奈良田方言のアクセント体系は、山梨西部方言のアクセント体系から変化して成立したと推定される（稲垣1957, 上野2011）。

	奈良田	山梨西部	東京
姉	1型 ○ ¹ ○ ¹ ガ	1型 ¹ ○ ¹ ○ガ	0型 ○ ¹ ○ガ
雲	2型 ¹ ○ ¹ ○ ¹ ガ	2型 ○ ¹ ○ ¹ ガ	1型 ¹ ○ ¹ ○ガ
役場	1型 ○ ¹ ○ ¹ ○ガ	1型 ¹ ○ ¹ ○○ガ	3型 ○ ¹ ○○ ¹ ガ
命	2型 ¹ ○ ¹ ○ ¹ ○ガ	2型 ○ ¹ ○ ¹ ○ガ	1型 ¹ ○ ¹ ○○ガ

4. 動詞のアクセント

・ 非過去ル形 0型、-2（次末拍）型、1型の3つ

		-ru	-ru=ka（疑問）	-ru=ra（推量）	-too（過去）
0型	着る	ʼki¹ru	ʼki¹ruka	kiruʼra¹¹	kitoʼo
	曲げる	ʼma¹ŋeru	ʼma¹ŋeruka	ʼma¹ŋeruʼra¹¹	ʼma¹ŋetoʼo
	聞く	ʼki¹ku	ʼki¹kuka	kikuʼra¹¹	ʼki¹itoʼo
	笑う	ʼwa¹roo	ʼwa¹rooka	ʼwa¹rooʼra¹¹	ʼwa¹raQtoʼo
-2型	見る	miʼru	miʼru¹ka	miʼru¹ra	miʼto¹o
	建てる	tateʼru	tateʼru¹ka	tateʼru¹ra	taʼte¹too
	書く	kaʼku	kaʼku¹ka	kaʼku¹ra	kaʼi¹too
	泳ぐ	ojoʼŋu	ojoʼŋu¹ka	ojoʼŋu¹ra	ojoʼi¹doo

	-ru	-ru=ka (疑問)	-ru=ra (推量)	-too (過去)
1型 歩く	a ^ɾ ri ^ɿ ku	a ^ɾ ri ^ɿ kuka	a ^ɾ ri ^ɿ kura	a ^ɾ ri ^ɿ Qtoo
起き上がる	o ^ɾ kja ^ɿ aŋaru	o ^ɾ kja ^ɿ aŋaruka	o ^ɾ kja ^ɿ aŋarura	o ^ɾ kja ^ɿ aŋaQtoo

• 推量接語ラ

- 前接形式に核による上昇がない場合、高く実現

⇒「高」というアクセントを持つと解釈できる。

- 前接形式に核による上昇がある場合、「名詞＋助詞」と同じく、接語のアクセントが抑制される。

- **動詞のアクセント型の所属語彙**

- 0型 着る、する、燃える、並べる、売る、座る、広がる、等。1類にほぼ対応
- 2型 見る、来る、起きる、助ける、切る、治る、乾かす、等。2類にほぼ対応
売り出す、燃え上がる、等の前部要素0型の複合動詞
- 1型 アリク（歩く）、入る
切り抜く、起き上がる、等の前部要素-2型の複合動詞

5. 形容詞のアクセント

・ 単純語の非過去 イ形（言い切り） 0型、-2型の2つ

		-i	-i=ka（疑問）	-i=ra（推量）	-kaQtoo（過去）
0型	赤い	ʼa¹kai	ʼa¹kaiʼka	ʼa¹kaiʼra¹¹	ʼa¹kakaQʼto¹o
	明るい	ʼa¹karii	ʼa¹kariiʼka	ʼa¹kariiʼra¹¹	ʼa¹karikaQʼto¹o
	眩しい	ʼhi¹zorosii	ʼhi¹zorosiiʼka	ʼhi¹zorosiiʼra¹¹	ʼhi¹zorosikaQʼto¹o
-2型	無い	naʼi	naʼi¹ka	naʼi¹ra	naʼka¹Qtoo
	白い	siroʼi	siroʼi¹ka	siroʼi¹ra	siʼro¹kaQtoo
	短かい	ʼmi¹zikaʼi	ʼmi¹zikaʼi¹ka	ʼmi¹zikaʼi¹ra	miziʼka¹kaQtoo
	恐ろしい	ʼo¹Qkanaʼi	ʼo¹Qkanaʼi¹ka	ʼo¹Qkanaʼi¹ra	ʼo¹Qkaʼna¹kaQtoo

-
- 派生・複合形容詞には1型も。調査不十分

「小短い」 ko^ɾmizi^ɿkai

「だだっぴろい」 da^ɾN^ɿbiroi, da^ɾNbi^ɿroi

「口うるさい」 ja^ɾta^ɿkaasii

- **形容詞のアクセント型の所属語彙**

0型 遠い、甘い、薄い、軽い、危ない、優しい、等

【3モーラ語は1類に対応】

-2型 良い、濃い、高い、長い、広い、苦しい、少ない、等

【3モーラ語は2類に対応】

• 先行研究

- 稲垣 (1957)

3モーラ形容詞 「一高型」 HLL、「三高型」 HLH の2つ

4モーラ形容詞 「一高型」 HLLL、「四高型」 HLLHの2つ

- 上野 (1975, 1976)

• 一部の活用形のアクセント

• 0型 (□型) 「赤い」「甘い」「薄い」「遠い」「アカリー (明)」「優しい」など

• -2型 (2-1型、3-2型、4-3型) 「無い」「良い」「濃い」「白い」「高い」「長い」「嬉しい」「短い」など

- Konishi (forthcoming) イ形に無核、有核の2つの型があるとする。

- 終助詞など接語を付加すると、形容詞イ形言い切りo型と動詞ル形o型は、非対称的 (赤字部分)

		ra (推量)	nenoo (伝聞)	jo (終助)	na (終助)	iso (終助)
赤い	ʼa¹kai	ʼa¹kaiʼra¹¹	ʼa¹kaiŋeʼno¹o	ʼa¹kaiʼjo	ʼa¹kaiʼna	ʼa¹kaiiʼso¹¹
明るい	ʼa¹karii	ʼa¹kariiʼra¹¹	ʼa¹kariiŋeʼno¹o	ʼa¹kariiʼjo	ʼa¹kariiʼna	ʼa¹kariiʼiʼso¹¹
着る	ʼki¹ru	kiruʼra¹¹	ʼki¹ruŋeʼno¹o	kiruʼjo	kiruʼna	ʼki¹ruiʼso¹¹

	cite (引用)	ni (終助)	ka (終助)	de (理由接助)	ŋa (逆接接助)
赤い	ʼa¹kaicite	ʼa¹kaiʼni	ʼa¹kaiʼka	ʼa¹kaiʼde	ʼa¹kaiʼŋa
明るい	ʼa¹kariicite	ʼa¹kariiʼni	ʼa¹kariiʼka	ʼa¹kariiʼde	ʼa¹kariiʼŋa
着る	ʼki¹rucite	ʼki¹ruʼni	ʼki¹ruʼka	ʼki¹ruʼde	ʼki¹ruʼŋa

	doo (コピュラ)	dura (コピュラ推量)	zjaa (コピュラ仮定)	daiba (コピュラ仮定)
赤い	ʼa¹kaiʼdo¹o	ʼa¹kaiʼdu¹ra	ʼa¹kaiʼzja¹a	ʼa¹kaiʼda¹iba
明るい	ʼa¹kariiʼdo¹o	ʼa¹kariiʼdu¹ra	ʼa¹kariiʼzja¹a	ʼa¹kariiʼda¹iba
着る	ʼki¹ru do¹o	ʼki¹ru du¹ra¹¹	ʼki¹ru zja¹a	ʼki¹ru da¹i¹ba

• -2型の語は形容詞と動詞が対照的

+ 前の語の核の位置を遅らせることがある

		ra (推量)	ŋenoo (伝聞)	jo (終助)	na (終助)	iso (終助) [†]
白い	siro ^ʔ i	siro ^ʔ i ¹ ra	ʔsi ¹ ro ^ʔ i ¹ ŋenoo	siro ^ʔ i ¹ ^ʔ jo	siro ^ʔ i ¹ na	ʔsi ¹ roi ^ʔ i ¹ so
短かい	ʔmi ¹ zika ^ʔ i	ʔmi ¹ zika ^ʔ i ¹ ra	ʔmi ¹ zika ^ʔ i ¹ ŋenoo	ʔmi ¹ zika ^ʔ i ¹ ^ʔ jo	ʔmi ¹ zika ^ʔ i ¹ na	ʔmi ¹ zika ^ʔ i ¹ iso
見る	mi ^ʔ ru	mi ^ʔ ru ¹ ra	mi ^ʔ ru ¹ ŋenoo	mi ^ʔ ru ¹ ^ʔ jo	mi ^ʔ ru ¹ na	miru ^ʔ iso ¹

^ʔ 任意の上昇

	cite (引用)	ni (終助) [†]	ka (終助)	de (理由接助)	ŋa (逆接接助)
白い	siro ^ʔ i ¹ cite	ʔsi ¹ roi ^ʔ ni ¹	ʔsi ¹ ro ^ʔ i ¹ ka	siro ^ʔ i ¹ de	siro ^ʔ i ¹ ŋa
短かい	ʔmi ¹ zika ^ʔ i ¹ cite	ʔmi ¹ zikai ^ʔ ni ¹	ʔmi ¹ zika ^ʔ i ¹ ka	ʔmi ¹ zika ^ʔ i ¹ de	ʔmi ¹ zika ^ʔ i ¹ ŋa
見る	(tate ^ʔ ru ¹ cite)	miru ^ʔ ni ¹	mi ^ʔ ru ¹ ka	mi ^ʔ ru ¹ de	mi ^ʔ ru ¹ ŋa

() 「見る」未確認のため「建てる」で代替

	doo (コピュラ)	dura (コピュラ推量)	zjaa (コピュラ假定)	daiba (コピュラ假定)
白い	siro ^{ɾi} doo	siro ^{ɾi} dura	siro ^{ɾi} zjaa	siro ^{ɾi} daiba
短かい	^ɾ mi ^ɿ zika ^{ɾi} doo	^ɾ mi ^ɿ zika ^{ɾi} dura	^ɾ mi ^ɿ zika ^{ɾi} zjaa	^ɾ mi ^ɿ zika ^{ɾi} daiba
見る	mi ^ɾ ru ^ɿ doo	mi ^ɾ ru ^ɿ dura	mi ^ɾ ru ^ɿ zjaa	mi ^ɾ ru ^ɿ daiba

-
- **言い切り0型のイ形とル形の音調が非対称な場合、すべて次のとおり**
形容詞イ形の直後（＝イ形と接語の境界） 上昇
動詞ル形の直後（＝ル形と接語の境界） 上昇しない
 - **接語のアクセント特徴（形容詞イ形と動詞ル形とで接語の上昇位置が異なる）とするより、形容詞イ形は -1型（語末モーラに核がある型）と考えたほうが合理的**

-1型		赤い /akaiˈ/	明るい /akariiˈ/	眩しい /hizorosiiˈ/
-2型	無い /naˈi/	白い /siroˈi/	短かい /mizikaˈi/	恐ろしい /oQkanaˈi/

• 接語のアクセント型（ka以外の終助詞については保留）

A. 前の語のアクセントを変えない。

A1. 接語自身はアクセントを持たない。前の語の核がそのまま実現する。

終助詞 /=ka/, **理由接助** /=de/, **逆接接助** /=ŋa/

A2. 接語自身がアクセント（上げ核、または、単独で「高」）を持つ。
前の語が無核の場合に接語のアクセントが顕現する。

コピュラ /=do^o/, /=du^{ra}/ (推量), /=zja^a/ (仮定), /=da^{iba}/ (仮定)
推量 /=^{ra}/

	終助 /=ka/	理由 /=de/	逆接 /=ŋa/	コピュラ /=do ^o /	推量 /= ^{ra} /
着る /kiru/	^o ki ¹ ruka	^o ki ¹ rude	^o ki ¹ ruŋa	^o ki ¹ rudo ^o	ki ¹ ru ^{ra}
赤い /akai ^o /	^o a ¹ kai ^o ka	^o a ¹ kai ^o de	^o a ¹ kai ^o ŋa	^o a ¹ kai ^o do ^o	^o a ¹ kai ^o ra
白い /siro ⁱ /	siro ⁱ ¹ ka	siro ⁱ ¹ de	siro ⁱ ¹ ŋa	siro ⁱ ¹ doo	siro ⁱ ¹ ra

B. 前の語の語末アクセントを消去し、必ず低く始まる。（ /」/ と表記）

B1. 接語自身はアクセントを持たない。

引用 /=」cite/

B2. 接語自身がアクセント（上げ核）を持つ。

前の語が無核か語末に核がある場合に接語のアクセントが顕現する。

伝聞 /=」ne「noo/

	引用 /=」cite/	伝聞 /=」ne「noo/
着る /kiru/	「ki」rucite	「ki」runenoo
赤い /akai「/	「a」kaicite	「a」kainenoo
白い /siro「i/	siro「i」cite	siro「i」nenoo

- 平安末期中央語における動詞連体形・形容詞連体形のアクセント
(金田一・和田1980、桜井1994: 582-584など)

動詞	第1類	HH, HHH	形容詞	第1類	HHF
	第2類	LH, LLH		第2類	LLF

- 奈良田方言の上げ核の位置は、山梨西部方言の下げ核の位置と対応。山梨西部方言から変化して奈良田方言のアクセント体系が成立した（本資料p.11）。
- 第1類連体形における動詞・形容詞の相違は、奈良田方言における動詞ル形・形容詞イ形の相違と矛盾しない。
 - 形容詞第1類において下降の遅れ HHF > HHH(L) が起こった後に上げ核体系への変化が起こったと考える。
- 「東京式アクセント」（金田一1977）で特殊拍が核を担える方言のなかにも、形容詞第1類が-1型の方がある（または、あった）のではないか？

6. 終助詞付加形の音調

- 終助詞二、イソは、前接の語の核による上昇位置を遅らせる

(1) /mi^ɾru/ -2型 「見る」

- | | | | | |
|----|--------------------------------------|--------------------------------------|------------|---|
| a. | te ^ɾ re ^ɪ bjoo | mi ^ɾ ru. | 「テレビを見る。」 |  |
| b. | te ^ɾ re ^ɪ bjoo | mi ^ɾ ru ^ɪ jo. | 「テレビを見るよ。」 |  |
| c. | te ^ɾ re ^ɪ bjoo | miru ^ɾ ni ^ɪ . | 「テレビを見るよ。」 |  |
| d. | te ^ɾ re ^ɪ bjoo | miru ^ɾ i ^ɪ so. | 「テレビを見るよ。」 |  |

(2) /mi^ɾtoo/ -2型 「見た」

- | | | | | |
|----|--------------------------------------|--|------------|---|
| a. | te ^ɾ re ^ɪ bjoo | mi ^ɾ to ^ɪ o. | 「テレビを見た。」 |  |
| b. | te ^ɾ re ^ɪ bio | mi ^ɾ to ^ɪ o ^ɪ jo. | 「テレビを見たよ。」 |  |
| c. | te ^ɾ rebjo ^ɪ o | mito ^ɾ o ^ɪ ni. | 「テレビを見たよ。」 |  |
| d. | te ^ɾ re ^ɪ bio | mito ^ɾ oi ^ɪ so. | 「テレビを見たよ。」 |  |

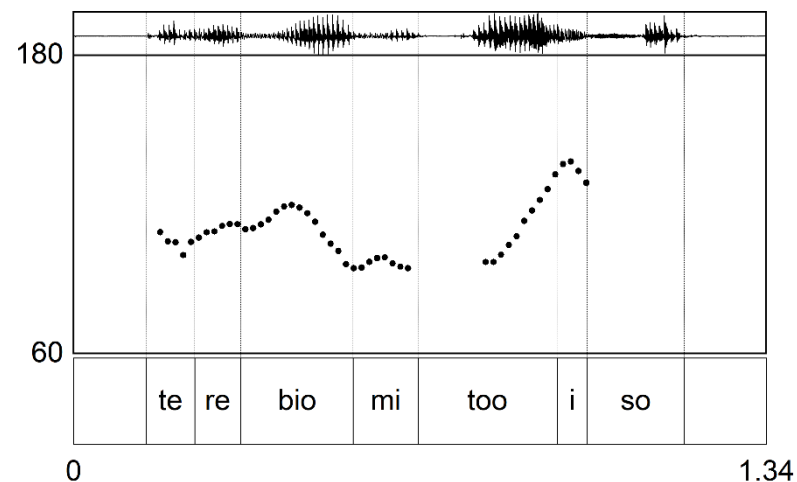
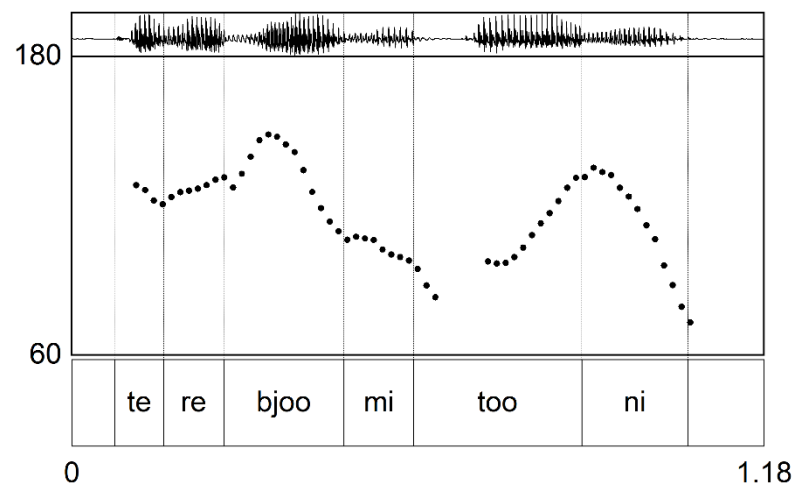
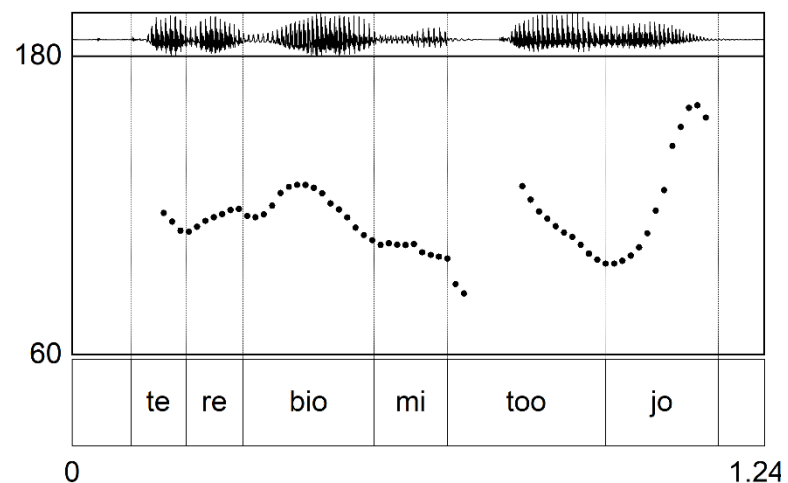
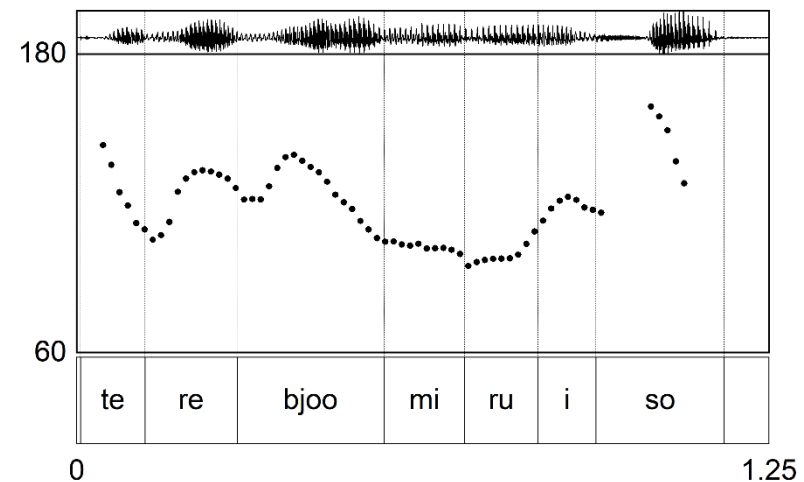
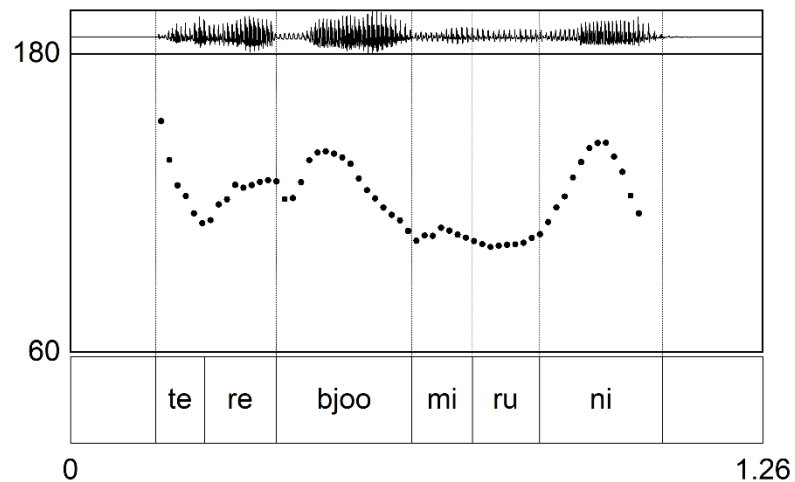
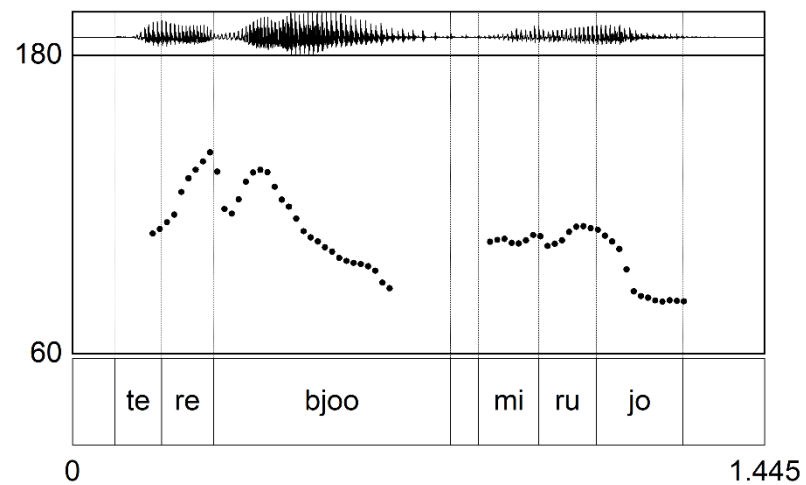


図1. (1b-d)(2b-d)のピッチ曲線(Praat ver.6.4.31, 松浦 2020を用いて作図)
 (1b) mi¹ru¹jo (左上), (1c) miru¹ni¹¹ (中上), (1d) miru¹i¹so (右上),
 (2b) mi¹to¹o¹jo (左下), (2c) mito¹o¹ni (中下), (2d) mito¹oi¹so (右下).

			/=jo/	/=ni/	/=i'so/
着る	非過去 /0/	ʼki¹ru	kiru¹jo	ʼki¹runi	ʼki¹rui¹so
	過去 /-2/	kito¹o	kito¹o¹ʼjo	ʼki¹too¹ni¹¹	ʼki¹too¹i¹so, kito¹o¹iso
	意志 /0/	ʼki¹zu	kizu¹jo	ʼki¹zuni	未調査
	推量 /-2/	kiru¹ra¹¹	kiru¹ra¹jo	kiru¹ra¹ni	*
見る	非過去 /-2/	mi¹ru	mi¹ru¹jo	miru¹ni¹¹	miru¹iso¹¹
	過去 /-2/	mi¹to¹o	mi¹to¹o¹jo	mito¹o¹ni	mito¹oi¹so, ʼmi¹too¹i¹so
	意志 /-2/	mi¹zu¹¹	mi¹zu¹ʼjo	mizu¹ni¹¹	未調査
	推量 /-2/	mi¹ru¹ra	mi¹ru¹ra¹jo	miru¹ra¹ni	*

赤 上昇位置の遅れを伴う * 形態論的に不適格

			/=jo/	/=ni/	/=i ¹ so/
赤い	無標 /-1/	ʼa ¹ kai	ʼa ¹ kai ¹ jo	ʼa ¹ kai ¹ ni	ʼa ¹ kai ¹ i ¹ so ¹
	過去 /-3/	ʼa ¹ kakaQ ¹ to ¹ o	ʼa ¹ kakaQ ¹ to ¹ o ¹ ʼjo	ʼa ¹ kakaQto ¹ o ¹ ni	ʼa ¹ kakaQtoo ¹ i ¹ so
	推量 /-2/	ʼa ¹ kai ¹ ra ¹	ʼa ¹ kai ¹ ra ¹ ʼjo	ʼa ¹ kaira ¹ ni ¹	*
白い	無標 /-2/	siro ¹ i	siro ¹ i ¹ ʼjo	ʼsi ¹ roi ¹ ni ¹	ʼsi ¹ roi ¹ i ¹ so
	過去 /-2/	si ¹ ro ¹ kaQtoo	si ¹ ro ¹ kaQtoo ¹ ʼjo	siro ¹ ka ¹ Qtooni si ¹ ro ¹ kaQtooni	siro ¹ kaQtoo ¹ i ¹ so
	推量 /-2/	siro ¹ i ¹ ra	siro ¹ i ¹ ra ¹ jo	siro ¹ ira ¹ ni	*

青 核による上昇の後、「高」が2モーラ以上続く

		/=do ^ɾ o/	/=do ^ɾ o=jo/	/=do ^ɾ o=ni/	/=i ^ɾ so/
飴 /0/ 無標		ʼa ^ɾ medo ^ɾ o /-2/	ʼa ^ɾ medo ^ɾ o ^ɾ ʼjo	ʼa ^ɾ medoo ^ɾ ni ^ɿ	amee ^ɾ so ^ɿ
過去		ʼa ^ɾ medaQ ^ɾ to ^ɿ o /-3/	ʼa ^ɾ medaQ ^ɾ to ^ɿ o ^ɾ ʼjo	ʼa ^ɾ medaQto ^ɾ o ^ɿ ni	ʼa ^ɾ medaQ ^ɾ tooi ^ɿ so
推量		ʼa ^ɾ medu ^ɾ ra ^ɿ /-2/	ʼa ^ɾ medu ^ɾ ra ^ɿ ʼjo	ʼa ^ɾ medura ^ɾ ni ^ɿ	*
帶 /1/ 無標		o ^ɾ bi ^ɿ doo	o ^ɾ bi ^ɿ doo ^ɾ ʼjo	obi ^ɾ doo ^ɿ ni o ^ɾ bido ^ɿ oni	obi ^ɾ i ^ɿ so
過去		o ^ɾ bi ^ɿ daQtoo	o ^ɾ bi ^ɿ daQtoojo	obi ^ɾ daQtoo ^ɿ ni	obi ^ɾ daQtooi ^ɿ so
推量		o ^ɾ bi ^ɿ dura	o ^ɾ bi ^ɿ dura ^ɾ ʼjo	obi ^ɾ dura ^ɿ ni	*
馬 /2/ 無標		uma ^ɾ do ^ɿ o	uma ^ɾ do ^ɿ ojo	ʼu ^ɿ mado ^ɾ o ^ɿ ni	ʼu ^ɿ mai ^ɾ so ^ɿ
過去		uma ^ɾ da ^ɿ Qtoo	uma ^ɾ da ^ɿ Qtoo ^ɾ ʼjo	ʼu ^ɿ madaQ ^ɾ too ^ɿ ni	ʼu ^ɿ madaQ ^ɾ tooi ^ɿ so
推量		uma ^ɾ du ^ɿ ra	uma ^ɾ du ^ɿ ra ^ɾ ʼjo	ʼu ^ɿ madu ^ɾ ra ^ɿ ni	*



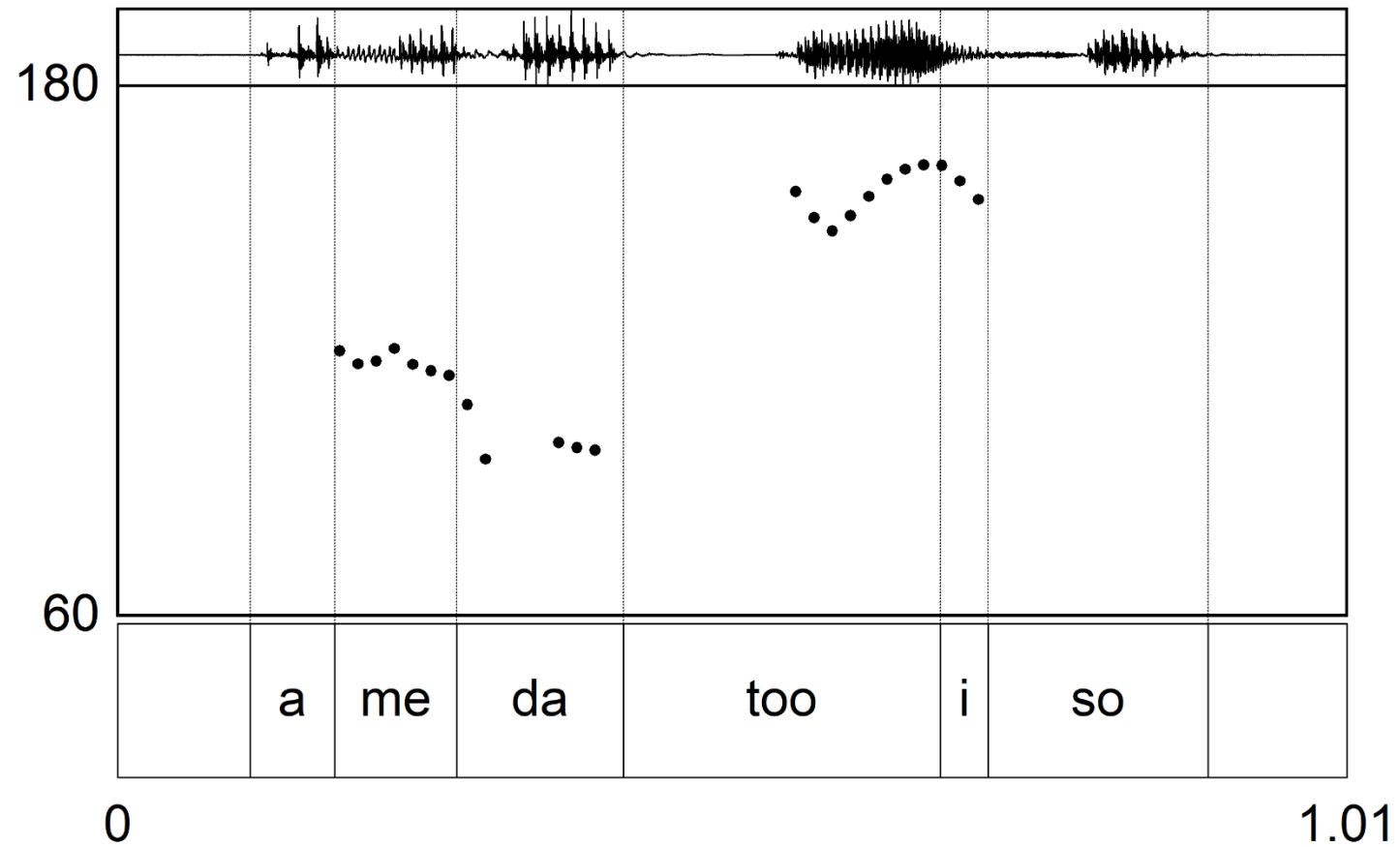


図2. 「a¹me da Q¹too i¹so」のピッチ曲線

-
- **二は理由の接続助詞由来だが、現在の奈良田方言では理由の接続助詞としては使いにくい（阪上2025）。**

- 話者Aは理由の接続助詞としての二を容認しないが、稀に用いることがある。
- 接続助詞の二は、上昇の遅れや高モーラの連続を起こさない。

(3) i^ɾma¹Qkara te^ɾre¹bio **mi^ɾru¹ni** si^ɾdu¹kani sitee^ɾro¹¹.

今から テレビを 見るので 静かに している。

⇒ 上昇の遅れや高モーラの連続は、文末（主節末）という環境で起こる。

- **上昇の遅れは、呼びかけ文においても見られる（加藤2025予定）。**

(4) a. /ma^ɾmoru/ (1型) ma^ɾmo^ɾruu. または **mamo^ɾru^ɾu.**

b. /masa^ɾjo/ (2型) ɾma^ɾsa^ɾjo. または **masa^ɾjo^ɾo.**

c. /o^ɾciai/ (1型) o^ɾci^ɾai. または **oci^ɾa^ɾii.** または **ocia^ɾi^ɾi.** (加藤2025予定, 表記改)

- 加藤は上昇の遅れが生じた型を「最終音節に上昇下降音調が付与された」と解釈。

⇒ 終助詞二・イソ付加文の上昇の遅れも、文末イントネーションがかぶさった表層音調と解釈できる。

- 文末イントネーション：最終モーラ近くでの下降（高から低への変動）
- 高モーラが連続する音調は、核の位置は保ったまま文末イントネーションが実現したもの。さらに高モーラの連続が回避され、上昇の遅れが生じる。核の保持よりも文末イントネーションの実現が優先される。

7. まとめと課題

• 本発表の主張と課題

1. 形容詞のイ形で無核とされてきた語は、後接する終助詞・接続助詞のほとんどを上昇させ、その点で無核の動詞と非対称的であることから、-1型（語末に核がある型）と解釈できる。

関連して、次のことを述べた。

- 1) 用言に後接する接語のアクセントタイプ（本資料 pp. 23–24）

課題：接語のアクセントタイプの網羅的な記述

東京方言や他方言（郡2020、小川2022、田中2005など）との対照

- 2) 形容詞イ形 -1型 を持つ他の方言の存在の可能性

-
2. 用言に終助詞二・イソが付くと、核による上昇位置が遅れる音調、高モーラが次末モーラまで長く続く音調が観察される。
- 文末イントネーションがかぶさったことによる表層音調と解釈

課題：基底の音韻表示から表層音調を導く音韻規則の精緻化

呼びかけ文と同じイントネーション型なのか？

なぜ二とイソで起こる？ 終助詞の文法的意味・機能と関わりがあるのか？

ほかにどのような環境で起こるのか？

奈良田方言における文末イントネーションの型の網羅的記述

参考文献・URL

- 稲垣正幸 (1957) 「奈良田方言のアクセント」 稲垣正幸ほか（編）所収, pp. 33–65.
- 稲垣正幸・清水茂夫・深沢正志（編）(1957) 『奈良田の方言』 山梨民俗の会
- 上野善道 (1975) 「アクセント素の弁別的特徴」 『言語の科学』 6: 23–84.
- 上野善道 (1976) 「奈良田アクセント素の所属語彙」 『文経論叢 文学篇』 11: 1–32.
- 上野善道 (1984) 「新潟県村上方言のアクセント」 『金田一春彦博士古稀記念論文集 第二巻 言語学編』 347–390. 三省堂
- 上野善道 (1989) 「日本語のアクセント」 杉藤美代子（編） 『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻（上）』 pp. 178–205. 明治書院
- 上野善道 (2011) 「「上げ核」の由来：奈良田アクセントの成立過程」 坂詰力治（編） 『言語変化の分析と理論』 pp. 614–599. おうふう
- 上野善道 (2019) 「特殊拍の諸問題」 『音韻研究』 22: 129–140.
- 小川晋史 (2022) 「動詞に助詞・助動詞がついたときのアクセント再考」 窪園晴夫・守本真帆（編） 『プロソディー研究の新展開』 pp. 67–87. 開拓社

-
- 加藤輝久 (2025 予定) 「山梨県奈良田方言における呼びかけイントネーション」 『2025年度 第39回日本音声学会全国大会予稿集』
 - 金田一春彦 (1977) 「アクセントの分布と変遷」 『岩波講座日本語 11 方言』 pp. 129–180. 岩波書店
 - 金田一春彦・和田實 (1980) 「国語アクセント類別語彙表」 国語学会 (編) 『国語学大辞典』 pp. 7–10. 東京堂出版
 - 郡史郎 (2020) 「日本語の助詞・助動詞類のアクセント: 一覧と使い分け, 変化の方向性」 『言語文化共同研究プロジェクト』 2019: 13–24.
 - 小西いずみ (2001) 「奈良田方言アクセントの現在: 東京式アクセントの習得・併用と従来アクセントの変化」 『人文学報』 320: 25–40.
 - 小西いずみ (2025) 「山梨県早川町奈良田の方言」
<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/~ikonishi/narada/narada.html> [2025.8.18最終アクセス]
 - 小西いずみ・三樹陽介・吉田雅子 (2022) 「山梨県奈良田」 セリック・ケナン他 (編) 『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』 77–150. 国立国語研究所言語変異研究領域

-
- 阪上健夫 (2025) 「山梨県早川町奈良田方言の終助詞「二」における文法化」 日本語文法学会ポスターフォーラム (2025.7.6) 発表資料
 - 桜井茂治 (1994) 『日本語音韻・アクセント史論』 おうふう
 - 田中宣廣 (2005) 『付属語アクセントから見た日本語アクセントの構造』 おうふう
 - 松浦年男 (2020) Pitch drawer for praat.
https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/229867/b817b61a23d7997583c81aed358dba95?frame_id=747130 [2025.8.18最終アクセス]
 - Konishi, Izumi (forthcoming) Narada. Yosuke Igarashi, Kenan Celik, Tatsuya Hirako, and Hayato Aoi (eds.) *Word-Prosodic Systems of Japonic Languages*. Leiden: Brill.
 - Uwano, Zendo (2012) Three types of accent kernels in Japanese. *Lingua*. 122: 1415–40.

謝辞 奈良田のことばについてお教えくださった方々に御礼申し上げます。本発表の内容は、次の助成を受けている。JSPS 20H00015, 21H04351, 23H00007, 23H00634, 25H00472
国立国語研究所 共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」、「実証的な理論・対照言語学の推進」サブプロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」